

対聯故事 秀才と老百姓の間に

—— 対聯研究ノートその2 ——

木之内 誠

1

対聯は今日の中国語による文芸の世界の中で、最も広範な作者を擁する文芸ジャンルの一つとなっている。とりわけ、中国の文芸活動の本流と目されてきた詩歌文芸の中では、その存在は決して無視できないだけの量的巨大さを持つ。例えば現在、どれほどの数の伝統的古典形式の詩が実作されているだろう。あるいは現代詩の作品が獲得しえている読者の数はどれほどだろうか。それらと対比して考えるとき、その存在の大きさというものについては、事はかなり単純な明白さを示している。

これまでに残されている対聯の総数は、一説に二十万副を越えるともいわれる。¹⁾しかし、対聯という文芸のありようからすれば、こうした数字をあげることも自体それほど意味のあることとはいえないだろう。在来作品の集計としてもこの数字がさほど確かな根拠を持ち得ないうえに、現在盛んに制作され続けている対聯作品によって、その総計は不断にふくれあがっているのだから。例えば、1988年の春節を前にして行われた中央電視台他主催の対聯コンクール「大団円迎春徵聯」では、中国全土からそして在外華人からも、短期間に八万副もの対聯作品が寄せられている。²⁾あるいは、1981年1月、広州の海鮮レストラン翠園酒家の開店記念の対聯募集には、半月間に三万二千余りの応募作があったという。³⁾

1) 常江「対聯常識」(『名聯鑑賞辞典』黄山書社、1988. 付録)での推計。

2) 『対聯』1988年第2期, p. 4に紹介。

現存するストック、そして流通するフローの絶対量においてかくも膨大なものとなる対聯作品群も、それらが作られ、書かれ、読まれ、聞かれるという実践的状况に照らして見るとき、決して均質な塊としてとらえられるものではないことを我々は知らされる。また、〈作品〉という便利な言葉も対聯を対象としたときには、現代の小説や唐代の詩編などについて使う場合のように、有効に機能してはくれないように見えてくる。

対聯について、「独立して使用される対をなす句」という定義付けがひとまず可能となるだろう。⁴⁾ 古典律詩などの一部をなす対句が、個別に一对のみで単純に完結した形態で作品として成立しているという意味で、ここでは一応「独立使用」という言い方ができるのだが、それがどのように「独立」しているかを見るならば、その様相は実に多様なものがあることが容易に観察される。

現代人にとって例えば唐代詩歌がそうあるように、対聯作品も文字による芸術としての性質上当然ながら、書物の上の詩編としての存在形態を持ちうる。一冊の書物にまとめられた個人作品集の中に並べられた一群の対聯を、我々は一人の読者として杜甫や李白の詩と同様に鑑賞することができる。例えば『郭沫若楹聯輯注』⁵⁾ や『林則徐聯句類集』⁶⁾ といった書名のもとに。その数は、正統的古典詩文の個人集のおびただしさとは比べようもなく少ないものではあるのだが。

書物の上で読まれる対聯の形態としてもっと一般的なのは、『古今対聯大観』であるとか『古今名人対聯彙選』などのタイトルのもとに、様々な作者、時代、タイプの対聯を広く総合集成したものだ。民国期、ついで「改革と開放」のこの十年間に、この種の対聯書として多くの類書が世にでていく。⁷⁾

3) 広州『羊城晚報』1981年4月22日掲載の記事による(張其中収集整理『対聯叢話』四川人民出版社, 1983所収)。

4) 余徳泉『対聯縦横談』上海古籍出版社, 1985, p. 1.

5) 薩嘉矩輯, 抄本油印, 1958.

6) 曲樹程, 楊芝明編, 山東教育出版社, 1983.

しかし、対聯は書物の上でだけ読まれる〈作品〉ではない。それよりむしろ、本のページを抜けてた外部の生活世界のなかで、街行く人の日常的な経験として眼に入ってくる文字としてあることが、その常態としてある文芸である。またそれは時に、建築の装飾の一部となり、また街頭の露店にならぶ商品として、その場で制作され売買の対象となる。また一定の状況のもと、人と人の間にやりとりされる贈答品ともなる「物」である。

対聯は、専門作家の書面文芸作品から交際の贈答品へと、言語芸術としての極遠に容易に到達してしまう「限界芸術」である。鶴見俊輔のいった「生活の様式でありながら、芸術の様式でもあるような両棲類的位置を占める限界芸術の諸種目」⁸⁾のひとつとしての性格を色濃く帯びている。

対聯の位置の「両棲類性」は、ちなみに対聯に関する書物や論文がどんな分類上の扱いを受けているかを見ることから明らかだ。例えば、古典的分類法にしたがって排列された叢書分類目録の『中国叢書綜録』では、「子部、芸術類、遊芸之属」の中に将棋、酒令、拳などの遊戯種目とならんで、言葉の遊戯として謎語、詩鐘などと共に置かれている。新刊書籍速報の『全国新書目』では「散文・雑著」類の末尾、「民間文学」類の直前にはめこまれる。『中国古典文学研究論文索引』⁹⁾では、「民間文学」の後に置かれた最後の中項目「詩文詞曲総論及びその他」のなかに小項目「対聯」をたてる。並ぶ小項目は「謎語」、「総集」、「翻訳」などだ。さらに「作家作品研究」の部ではまた別に明清の各作家の下に個別の論文が置かれている。

このように、対聯は書目の中でも一定の居場所をもてずに、時々にあちらこちらにいささか身の置き所なしという風情で組み込まれている。

そのさまは、作品ないし物としての対聯そのものが、現実の生活世界内で

7) 拙稿「対聯関係書籍分類目録」(小樽商科大学『人文研究』79輯, 1990所収) 参照。

8) 鶴見俊輔「芸術の発展」(『限界芸術論』所収)。

9) 中山大学中文系資料室編, 広西人民出版社, 1984。

様々な状況下に組み込み可能な、開かれた態様を示していることもパラレルの関係にある。

「独立して使用される対句」たる対聯は、しかし純粹芸術として孤高の「独立」を保つためではなく、まさにその逆にさまざまな活動領域への接合を可能にするべく、書面からの脱出を成し遂げた文字たちなのである。

以下の小論は、「限界芸術」としての対聯の対聯たるゆえん、ないしその面白さの中心とも見える自在な組み込み可能性、自由闊達なポジショニングの一端を「対聯故事」にみようとするものである。

対聯故事とは、その名の通り対聯のもつ面白さを話の妙味の中心にすえたものだ。そこから中国の人々がどんなふうに対聯を経験し、感じているのかをみることができるだろう。

数字ないし数十字の字句そのものを独立した作品として、切り放して読んだだけでは現れてこない対聯の面白さ、妙味を「対聯故事」の中に見よう。中国という言語実践の場にあっては、この状況依存性は古典詩歌のまわりにも常に見えかくれしていたものである。

2

対聯故事そのものを読んでみる前に、対聯と対聯故事の関係について少し考えておきたい。

人々の前にはまず、言葉自体、さらにその言葉を書き付けた紙、板自体としての対聯がある。テキストとその物理的支えとしての二枚の紙、あるいは木板などの物的存在として場の中にある対聯である。そしてそれに付着して、二次的に生み出され流通していく文字ないし言葉がある。最初の場に置かれた対聯が、固有の場と状況を離れて再消費、鑑賞されるためには、ある程度必然的に副次的な言葉が対聯自体に付着してくることもなる。そうでなければ、状況依存性の極めて強い対聯は、その面白さを二次的な受容者たる一般読者には伝えにくいからである。言語テキストそれ自体の自立性は、例えば近代小説などと比較すれば、対聯にあっては相対的に低い。こうして付着

してきた言葉、対聯がそのテキストの周囲に増殖させた二次的なテキストの一部として、ひとまず「対聯故事」を見ることができよう。

このような、対聯の側からの伝達上の要請として派生した副次的テキストという性格は、「聯話」において強くみられる。「聯話」とは、文字教養人を読者として文語体で書かれた対聯をめぐる評論、逸話、趣聞の記録である。その最初の集成として、十九世紀半ば道光年間に出た梁章鉅の『楹聯叢話』がある。『楹聯続話』、『楹聯三話』と続く彼の聯話集には、先立つ筆記類から引いたものを含めて、総計一千則あまりの種々の聯話が書き留められている。

唐代に繁栄した詩文芸が、晩唐に『本事詩』を産み、続く宋代に至って詩人の逸事や詩の評論を集めた「詩話」のジャンルを確立したように、清代に大いに普及発展を遂げた対聯文芸も、十九世紀半ばになって「聯話」を生み出すに至った。その後、民国期には呉恭亨『対聯話』、楊祚昌『西湖聯話』など多くの類書が出ている。

これらの聯話では、聯話の筆者自身の作を含む対聯作品の紹介、あるいは評論としての文言を費やしていることが多い。曰く、某所の某亭で我が友人の某氏がこんな対聯を作った云々。確かに固有の場所にさらされる対聯では、その対聯を読者に紹介しようとするれば、制作にあたっての時、場所、状況を説明しなければ、対聯の字句自体の意味が十分に伝わらないことになる。

これに対して、一般民衆の間にも、対聯に関する大量の説話、伝説が伝えられている。「民間対聯故事」と呼ばれるものである。

ここでは聯話の場合と違って、対聯はその周囲に二次的な文言をめぐる言表の核というよりは、むしろ物語展開上の道具立てのひとつとして登場することとなる。詩句としての対聯の言葉よりも、それを一つの構成要素としたストーリー自体の面白さに興味は集まり、筋立ての重み「故事性」が強まる。例えば聯話、特に名勝聯にちなんだ聯話などでは、動きを持った人の姿は登場せず、対聯そのものを鑑賞させようとするのに対し、民間の故事の中では人物の動きがなければ話は成立しない。

* * *

この十年ほどの間に、中国では対聯故事類を集めた通俗的読み物が、30種以上も刊行されている。そこには文人逸事的な聯話と、本来の意味での民間故事とが取り混ぜて収められている。

ここで主に素材を採ろうとしている『対聯・民間対聯故事』誌も、文革期のゆりかえしのように起こった、対聯を含む旧文化一般に対する再評価ムードの中で、1985年1月山西省太原で発刊されたユニークな隔月刊誌である。対聯についての最初にして唯一の全国的定期刊行物であるこの雑誌は、装丁もなかなか変わっていて、二つの表紙とタイトルを持つ。右めくり縦書きの『対聯』と、左めくり横書きの『民間対聯故事』とは、中央に墨跡の写真版などの『聯墨縁』のページを挟んで各32ページ背中合わせに一冊の雑誌を構成している。判型も横長の三十二開（B6大）という、あまり類例のないもので、一見するとやや大ぶりの連環画冊を思わせる。

この雑誌がその編集方針の一つとする「雅俗共賞の風格の提唱」は、研究誌的な『対聯』の「雅—教養層」に対して、通俗読み物的な『民間対聯故事』の「俗—大衆」との体裁の上での独特の共存形態にも現れている。いわば雅俗の接するところに独自の領域を持つ対聯という形式の「両棲類的」な性格が、自ずと編集者にこの一風変わった体裁を選ばせたといってもいい。

『対聯』誌の部分では、主に作者文芸としての対聯創作に関しての検討が行われ、『民間対聯故事』の方では、無名の民衆たちを享受者としてきた限界芸術としての対聯の面目が、「故事」をはじめとする種々の通俗的な文芸形式のなかに見られる。

読者対象としては、都市と農村の文化館（站・室）や各種倶楽部の工作者、中小学教師、引退後の老人、農村地区の幹部、農民や労働者の対聯一般愛好者を想定し、「写対子、練書法、講故事、賽聯語」という実用的な目的、効能を挙げて、読者に定期購読を呼びかけている。¹⁰⁾

そして、この雑誌の執筆、投稿者にしても、専門の研究者・作者などでは

なく、いわゆる「業余」アマチュアの「文史愛好者」や「写作愛好者」が中心となっている。誌上の各編の末尾に記された彼らの「所属単位」から、現在の対聯文芸の社会的な位置をある程度うかがい知ることのできるようだ。

その幾つかを書き出してみると、

○小・中学，教師進修学校，郷鎮企業幹校，採油廠学校，針織廠技工学校，
县教育局などの各種の教育関係機関

○県文化局，県文化館，市文化局など大衆文化活動を指導する行政組織

○人民日報機動記者組，山西日報記群部

○县委宣传部，县委组织部，県党史弁公室，部隊政治部宣伝科

○県志弁公室，県文物管理所，郷政府，郵電局，保健站

など県級以下の幹部が目につく。

そして特に所属単位名を明記しないものは、農民や引退した老人たちの投稿であろうか。

彼らの多くは、ローカルな郷村社会の中にあつて、文芸専門家と一般大衆、「雅」「俗」の間の中間層的位置、ないしその接する界面に身を置く人々である。

彼らが、対聯そのもの、そして対聯故事などの制作と流通伝承の経路のなかで、一定の位置を占めているということ。そして、その位置は、明清代の郷村社会のなかで、かつてある種の人々が占めていた場所、機能を彷彿とさせるものでもある。

ここに毎号数編ずつ掲載されている「対聯故事」の各編についてみると、それぞれの長さは四百字から七、八百字程度の比較的短いものが多い。現代の大衆の生活を話の素材、背景とするいわゆる「新故事」とともに、旧時代から語り伝えられた「伝統故事」をも収めるが、口述者からの採集、整理のプロセスを踏んでまとめられたことを明記するものばかりではなく、民間文

10) 『対聯』1987年第5期「聯墨縁」欄。

学のいう口承性は不明確なものがかかなり含まれている。むしろセミプロ的書き手による「故事文学」的な通俗読み物とみなした方が適当なものも多い。

しかし、近年雨後の筍のように出版されている故事選の類の書物に取られる話には、他書からの引き移しが多いのに対して、この『民間対聯故事』誌では、講述者を明らかにしたものや新作が多く、総じて生きがいい。¹¹⁾ 八十年代の「文化熱」、それを上から覆う大波のような市場経済状況の加熱した進行ぶりなど、そこには対聯の今をかいまみせてくれる証言が満載されている。宋代に形をなし、明清代に広がりや深みをました対聯が、現在なおジャンルとして生成発展の過程にあり、その生命力を枯れさせていないことを、それらは如実に物語っている。

日常の世界に組み込まれてある状態で、いわば「根付き、泥付き」のままの対聯文芸の現状をみる上で、『対聯・民間対聯故事』誌の諸編は、恰好の素材を提供してくれている。

小論では、以下主にこの雑誌に材料を採って、そこに掲載された「対聯故事」の趣向を読むところから、対聯が持つ独特の面白さがどのように見えてくるのか、いましばらく関心を向けてみよう。

3

ここに取り上げようとする対聯故事は、そのなりたちとしては、歴史上の人物の実話に基づく伝説に類するものもあれば、架空の人物を主人公に紙の上で創作された通俗文学の作品と呼ぶべきものもある。その成立、来歴は必ずしも単一、均質ではない。しかし、いずれにしてもこれらの故事の様々な趣向は、話を聞く人々がいったい対聯のどんなありようについて面白さを感じているのか、そして故事を紡ぎ語ろうとするものが対聯のどんな持ち味を、

11) 「本誌は新創作と新搜集整理の対聯稿を主とする。すでにあちこちの雑誌等で使いまわされた内容の原稿は発表しないよう。」などと編者が紙面で投稿者にたびたび注意している。

聴衆の興味を引くプロットに結びつけられると考えたのかを、異境の我々にも教えてくれているのは確かなのだ。

* * *

対聯故事には、どんな人物が登場するのだろうか。当然、役回りとしてどうしても欠かせないのは、文字の形に書かれたものであれ、口頭の聯であれ、筆を振るって文字を書き、また即興で句を口ずさむ、対聯の制作者である。

そして、張り出され、声を響かせた対聯を、その眼で見、耳で聞いて、何らかの反応を起こす享受者たち。また、時には、対聯の制作を主人公に依頼する金持ちのクライアントも登場してくる。

明、清代を通じて一般民衆にも身近な存在となっていた対聯だが、その措辞用語は、あくまで古典的詩文の文言を基本とし、平仄をふまえた対句法と相まって、その制作には一定の古典的文学教養を要求される。対聯が、「その根を文学芸術の範疇に張り、その花を民間群衆文化に向かって咲き広げる」¹²⁾と言われるゆえんである。

旧中国を時代背景とする伝統故事の中で、対聯の作り手としてしばしば登場するのが、いわゆる「秀才」たちである。彼らは、官僚支配階級にその予備軍として連なる官職補任候補者層のメンバーである。科挙の受験勉強を通じて培われる古典的文学教養は、彼らを知的エリートとして、大衆から分離させる。詩文制作の専門技能を持つ読書人階層にとって対聯は、日頃の修養の成果のあくまで一種の余技として生み出されるにすぎないものとされる。

秀才たち、そしてより明確に支配階級の一員である各ランクの地方官たちとともに、伝統対聯故事中の人物の常連として登場するのが「教書先生」、村塾の教師たちである。秀才や地方官僚らが、知的な面のみならず、それと同時に政治権力的な意味でも、大衆に優越するものとして現れてくるのに対し

12) 郎会成「文化站應加強對聯文化建設」『民間對聯故事』1988年第1期。

て、村塾の教師たちには、民衆に対する政治的支配被支配の関係は顕在化していない。そうした意味で、寺子屋の先生たちの故事の中での役回りは、秀才らのそれともかなり異なったものとなることもある。

清の乾隆年間、名高い文人の鄭板橋が山東で県の長官をしていたときのこと、ある日一人の「教書先生」が、雇い主から学識不足だと言いがかりをつけられて、一年分の謝金「八吊」八千文を不払いのまま追い出されようとしていると訴えてくる。鄭板橋は、この老先生の力を試そうと対聯で問題を出す。部屋に掛かっていた灯籠を指さして、

四面燈，單層紙，輝輝煌煌，照遍東西南北，

という上聯を示して、対になる下聯をその場で作らせる。老先生は、しばらく考えた後、自分の境遇を織り込んでこんな答を出す。

一年学，八吊錢，辛辛苦苦，歷尽春夏秋冬。

これを聞いた鄭板橋は、この教師の力量を認めて雇い主の金持ちを罰し、契約の謝金を払わせる。¹³⁾

この話には、財力を持つもの、知識をもつもの、そしてそれを超越し調停するメタ知性としての高名な文人が登場する。対聯故事の主だった役者の顔ぶれとしては、あとはしたたかな多数派たる「老百姓」、民衆の出番を待つだけだ。

教育システムの民間への普及浸透は、対聯の時代明清代を特徴づける大きな社会的現象である。实用レベルの読み書きを私塾で習う子供の数は、都市、農村を問わず大幅に増えていく。¹⁴⁾

伝説対聯故事と題して『民間対聯故事』誌上に掲載された次のような話は、塾の教師と漁民たちを主人公として、郷村への教育の普及を背景としている。

13) 周廷湘「鄭板橋出聯断案」『民間対聯故事』1988年第2期。

その昔清朝の頃、江西は鄱陽湖のほとりの人口二百人余りの漁村。村の漁民たちは、読み書き・計算が出来ないばかりに、街に魚を売りに行っても、みすみす損をさせられてばかりいる。そこで、彼らは後継ぎの子供たちには読み書きを習わせねばと決意し、村の祠堂に塾を開き、省府南昌から蔣という先生を招いた。しかし、この教師は、自分の学識を誇って村人を見下している倨傲な男だった。字などは知らないがなかなか才気ある村の若者が、ある日この教師の高慢の鼻をへし折れないかと図って、対聯問答を仕掛ける。「誰も下の句の継げない片割れの上聯があるんですが、先生の学識でうまくまとめてもらえないものでしょうかね」。若者の挑戦的な口ぶりに機嫌を悪くした教師は、売り言葉に買い言葉で「もしできなければ教室の梁に首をくくってやるわい」とまで言ってしまう。そこで若者の唱えた上聯は、「杯漏漏乾船漏滿」。同じ文字を三度重ねて読み込んだこの「重言」聯にかなう下聯を、教師はどうしても答えられず、逆上してその晩ついに首を吊って死んでしまう。

村人は、後任の教師を探し求めて、今度は大金を積んで景德鎮から単という教師を呼んで来る。前任者の幽霊など恐れぬ単は、祠堂に住み込む。ある夜、彼の机上の灯芯が一陣の風に吹かれて危うく消えそうになる。これを見た彼は、はたと気付いて叫んだ。「出来たぞ、灯吹吹熄火吹紅、だ」。

この後、村人はこの教師を尊敬して、塾にはますます生徒が増えた。そこで村人は、通学の路をさえぎる川に橋をかけ、これに「恩師橋」と名付けた。¹⁵⁾

14) 清末には、基礎的な読み書きを教える塾の普及分布は、学齡の男児の三分の一ないし二分の一を収容するまでに達していたという推計がある。Evelyn S. Rawski, "Economic and Social Foundations of Late Imperial Culture," *Popular Culture in Late Imperial China*, ed. David Johnson (Berkeley: University of California Press, 1985), p.11.

知識と生活＝「雅」と「俗」の会合ゾーンに実践的場を広げる対聯という文芸は、故事の話の中でも知的エリートと民衆が言葉の技芸を介して出会っている。その出会いは、お互いにとってそれほど幸福なものであったとはいえないかもしれないが。この話の漁民たちと二人の教師との関わりかたは、民衆にとっての「知」の獲得に対するアンビバレントな関係性を暗示するようだ。

文人たちの側からの対聯をめぐる逸話の記録である「聯話」のなかにはほとんど見ることのなかった民衆の姿が、ここには現れている。そしてまた文人自身の姿が、対聯故事では民衆の側の目から、「聯話」での自画像とはひと味違ったものとして、描かれ語られることになる。

文才を頼みひけらかす「秀才」を農民や子供、女が機知をもって嘲弄する対聯故事は数多い。¹⁵⁾ 優越的位置を占める者に対して、劣弱者とみなされるものたちが、時あってその立場を逆転させる。その結末には決まって、公衆の前でへこまされてぐうの音も出せず、すごすごと退散するエセ秀才の後ろ姿がある。

そこに展開される対聯問答は、時に文化的エリートと非エリートとの、価値づけられた文言の生成能力とその生成物という「文化資本」をめぐる闘争の様相を呈する。

明清代を通じて進展した民衆層の識字化が、こうした故事の社会文化史的背景をなしている。少数のエリート教養人と非エリート大衆の間の、文言の操作能力の上での決定的な開きは、この時代を通じて、相対的にはその差を縮めている。故事の中で民衆側が、読書人たちに対して時にはゲリラ的、散発的な勝利を収めもするのは、彼らの実力の上昇をある程度反映した逸話とみなしうるのだろう。

15) 呉慶福「漁民聯話“恩師橋”」『民間対聯故事』1988年第5期。

16) 王慶新編著『古今神童才女巧対』山東人民出版社、1988では、こうした子供「神童」、女「才女」を主役とする故事、伝説が集められている。

昔、一人の老石工が、橋を築き上げるたびに、対聯の上の句を書き出して、通りかかる人に、これと対になる下聯をもとめていた。この話を聞いて、ある秀才が出向いていく。秀才「石工ふぜいが、文墨をもてあそばさうというのか」。石工「いえいえ、ほんのてすさびでして」。受けて立とうという秀才にうながされて、石工が示した上聯は、

開大山，砌小石，修拱橋，舖平路，通南通北，

「大，小」「拱，平」「南，北」という三組の反義語を組み込んだこの上聯に、秀才は落ちつき無く長いこと考えあぐねていたが、一向に下聯を接げない。そこへ竹を担いだ箆職人周りの人垣を分けて歩み出た。「あなたに出来んようなら、わしがひとつ」といって吟じたのが、

砍長竹，劃短箆，挽円圈，箍扁桶，装東装西。

これを聞いたまわりの衆はこぞってほめそやし、石工は「兄弟，なかなかやるじゃないかね」と箆職人に声をかける。¹⁷⁾

石工と箆職人が交わしたこの聯語は、文人たちがその学殖を誇るような古典的文藻を駆使したものなどではない。しかし、山から石を切り出し橋を作り、竹を裂いてひごを作り箆を編むという彼らの日々の生産活動を素朴に語って、そのまま見事に対句をなしている。そして、秀才が自負する正統的文化に対するカウンターカルチャーの勝利を謳歌する。ここで、石工たちと秀才を引き合わせたのは、対となることを求める言葉、対聯である。それは、読書人と大衆という二つの言語世界にまたがって繁茂する圏域を持ち、両者の遭遇する時、双方に言葉の技を競わせることにもなる種目なのである。

こうした民衆のたまさかの勝利の逸話伝説を生みながらも、しかし、総体としての民衆層は結局のところ受動的な受容者として、文字教養層によって囲い込まれていったというべきなのだろうか。

17) 「箆匠巧対石匠」尚文化編著『古今対聯故事選』瀋陽・春風文芸出版社，1984，p.160.

識字率の向上は、日常生活の諸場面での文字の使用を広く促し、逆に識字以前の郷村社会にはなかった文字の専門家への依存の局面を生み出す。非識字大衆はもとより、簡単な読み書きは出来ても詩は作れない非エリート識字層も、より高次のエリート識字層の文人、秀才あるいは教師などの専門家層を媒介として、文字に書かれた対聯の制作に関与することになる。そうであるからこそ逆転のモチーフは、読書人階層の優越支配の下にある故事の聴衆にいつときカタルシスの解放をもたらしたわけでもあるのだろう。

* * *

これまでにみた伝統故事のなかで秀才や村塾の教師らがつとめていた役柄を、新故事では誰が引き受けることになるのだろうか。

革命と戦争の時期を時代背景とする故事では、共産党の工作員や八路軍幹部などが、それまでの文人、秀才の位置に登場してくる。往々にして嘲弄の対象となる旧文人らと違って、当然彼らは「正面人物」としての役割を果たすことになる。

現代の対聯故事では、県級の国家幹部、農村で一般大衆と密着する基層幹部や小中学校の教師たちが、対聯の作り手の常連として現れてくる。

中秋節の晩、村の小学校の先生たちが月見の会に集っているところへ、ひとりの教師の遠縁の親戚にあたる村の党支部書記がやってくる。親戚同士の彼ら二人の対句の応酬で一座は大いに盛り上がる。¹⁸⁾

小学教師だという筆者の本来の執筆意図はともかく、私には無惨にもばかげた話としてしか読めないのだが、何人かの対聯制作者の登場する故事としても一つ引こう。

18) 龔本正「老師賞月喜聯対」『民間対聯故事』1988年第5期に教師対聯故事として。

戦争で傷痍軍人となった親子二代の解放軍兵士とそれに嫁いだ妻たちに周囲の人々から時々の対聯が送られる話。婚礼を数日後に控えて志願して行った朝鮮戦争で片腕を失って復員した劉青山に、以前の婚約者は結婚に二の足を踏む。気をもむ親戚たち。村の婦女聯合会主任が劉に嫁ぐ。その婚礼の宴に私塾の老先生が祝いの喜聯を持ってくる。時は流れ、劉の息子が中ソ国境の「自衛反撃戦」で片目を失明。凱旋慰労歓迎会の席上、小学校の老教師が功績を称える対聯を彼に献ずる。そして次には、娘が中越国境の老山戦線で右足を地雷で吹きとばした兵士と結婚する。春節に帰郷した彼らのところに、郷の党委書記が年始に訪れ春聯を持参する。村の衆が門前に張り出されたのを見たのはこんな対聯だった。

父征戦子征戦婿征戦父子婿同征戦，
母賢良媳賢良女賢良母媳女皆賢良。¹⁹⁾

もちろん「老百姓」一般庶民も、自ら筆をとって対聯を書き記し張り出す主体として現れる。

『民間対聯故事』誌の一読者は、湖北省の山間の小集落に興った最近の「対聯熱」をこう伝える。「全村二十五戸、百七人の部落に、三十一人もの対聯愛好者がいる。彼らは夏の夕涼みや冬の炉端に三々五々寄り集まっては、対聯を吟じ批評しあう。年越しともなれば、対聯熱はいやまし、家々の大小、前後の門口には、彼らの自撰自筆の春聯が貼り出される。」²⁰⁾

こうした対聯ブームは、農村のセミプロ的対聯作者の実入りをなかなかのものにしているらしい。農村社会内部でいまやひっぱりだこのスペシャリストとなった対聯制作者たちの現況の一端を我々に窺い知らせてくれるこんな記事もある。「十一期三中全会以降、農村の家々で、そしてまた商工業者らの間でも、各種の対聯の使用の機会と頻度は大いに増えている。四川省合江県

19) 劉建斌「兩代戍辺効中華」『民間対聯故事』1987年第4期に新編対聯故事として。

20) 吳秋芬「吟対撰聯在山村熱起来」『民間対聯故事』1987年第2期。

を例にとると、72の行政郷、4カ所の鎮、郷場40数カ所からなるこの県だけで、対聯の制作と販売に従事するものが三百人ほどもいる。彼らの毎月の一人あたりの収入は六、七十元になり、春節の書き入れ時には百元から二百元にも達している。」²¹⁾

やはり誰しもが、気の利いた対聯を自分で作れるわけではないのだ。一定程度以上の文字教養を持つものと持たざるものとの間に横たわる溝、潜在的な矛盾相克は現代中国、ことにその農村部では決して解消しているわけではない。教育の絶対的貧困は、知識層と大衆をかつての秀才と老百姓のように隔て続けている。文化的上層から下層へと広まった「沈降文化財」としての性格は、対聯に依然として深く刻印されている。

しかし、公刊される印刷物の中で我々が眼にする現代の対聯故事には、伝統故事に緊張を与えていたしかけの一つであった読書人と大衆との遭遇と逆転のモチーフはもはや現れることはない。それにかわって為政者側からの政策宣伝や、それに対する大衆の自己保身的な支持表明が、さりげなく或いはあからさまにまぎれこんでいたりするのを見るばかりだ。

4

場に掛けられ書かれた文字の形を取る対聯の中では、二つの詩句は左右それぞれの位置で空間的な対応をしている。口頭的な状況のなかでそれは、時間的に引き続いて行われる二者による掛け合い、応答の形を取って現れる。対聯故事の中には、オーラルモードの対聯「応対」を扱うものが多い。民衆の中で語り聞かれるという故事のメディア本来の特質からしてもそれは自然なことであろう。語りを聞くものは、主人公が出された課題としての上聯にどのように下聯をつなげるのかを懸念しながら、話の続きに興味を引き継がされることになる。

21) 宋希文「把農村対聯水平提高一步」『対聯』1987年第4期。

主人公は「触景生情」、その場の情景を見てとっさの機転を働かせて解答を見いだす。下聯が聴衆に示される前に提示される情景は、応対に苦しむ主人公にとって救いの綱であるのと同時に、話の聞き手にとってもここで主人公と一緒に考えるヒントを与えられた事になる。課題の解決を遅延してその間に聴衆の参加を呼び込み、しかるのち急転直下の解決で快感を味わわせるというしかけである。

掲げられた書跡としての対聯も、その制作の過程を語る故事の中では、やはり二人の人物の口頭での応酬の作とされているものも多い。ここでは、対をなす詩句は、ある場面で対の存在となっている二人の個人の間、綾なる言葉の掛け合いとして立ち現れる。対聯故事はその詩的な言葉の生み出されてくる現場の報告でもある。

対聯の応答性は、二人の掛け合いという点において、「相声」（漫才）とも相性がいい。『民間対聯故事』誌上には、対聯を題材にした「相声」の台本が、毎号のように掲載されてもいる。そして、例えば、二者相對して交互に手を進めていく囲碁というゲームも、掛け合いの対聯と自然な取り合わせを見せることがある。²²⁾

しかし、対になりたがる言葉としての対句の応答に、なによりふさわしく物語を引き寄せるのは、それが一對の男女の仲をとりもつ媒介物としての働きを見せる場合だろう。上聯を出して、下聯を答えさせる口頭聯の応酬は、様々な形をとって縁をつなぐ言葉として男と女の間に入り込む。

新故事では、夫婦や婚約者同士の日常的背景を持ったやりとりとして口頭聯をからめた話も多い。以下は、軍に所属する投稿者が『民間対聯故事』誌に寄せた「生活対聯故事」から。

妻は農家の出で初級中学卒の学歴しかないが、対句を作るのが得意だ。

22) 「垂釣対圍碁」は、蘇軾と黃庭堅の対局という設定の故事。前掲『古今対聯故事選』所収。

夫が休暇を取り、雨の中わが家に帰り着く。興にまかせて夫が「泥寧路遙，難阻夫妻團圓」とやると、妻は即座に「迷蒙雨至，喜有全家歡樂」と受けてまとめる。妻が食事の支度を始めると、それを見て夫は「一日三餐，柴米油塩」と口に出してみる。妻が慌てず騒がず答えて言うには、「兩地千里，筆墨紙硯」。わが家でみる月に「今晚月真圓」と感慨深げな夫に対して、妻は「明天日更短」、あなたと一緒に時間は特別早く過ぎていくのよ、と甘えてみせる。²³⁾

婿選びの条件として女の側から上聯を示し、それにふさわしい下聯を男に求めるという筋立ては、伝統故事で見られる。あるいはその類形として、新婚初夜の閨房の入り口で新妻が新郎に対聯で難題を出し、出来なければ部屋に入れないというような趣向もしばしば使われる。川劇や越劇などの伝統劇のラブロマンスの舞台にもプロットの味付けとして同様の趣向が登場する。川劇『三難新郎』では、新妻の蘇小妹が上聯を出して、才子を自任する新郎に難問を仕掛ける。困っている新郎秦少游に新婦の兄の蘇軾が助け船を出して、小石を池に投げこむ。そのヒントではたと気づいた秦少游は見事下聯を答えて、やっと寝室に入ることを許される。²⁴⁾

婚礼の習俗のひとつとして「喜聯」言祝ぎの対聯を双方の家の門口などに貼り出すのは、中国各地で一般的に行われてきた習慣だが、雲南の少数民族白族の婚俗には故事や舞台の上でみたような口頭の聯語のやりとりが実際に行われるという。婿側が嫁取りに女の家に来てくると、花嫁側の親戚や友人が次々に上聯を出して婿側に答を要求する。これに答えられないと男の側は宴席に入れてもらえない。男の側では、これに備えて詩文の教養に通じた人を同行することも多い。²⁵⁾

23) 吳進文「妻対情意深」『民間対聯故事』1988年第5期。

24) 王朝聞「由対聯引起的思考」『対聯』1987年第2期から引用。

25) 楊發祥「白族婚聯趣談」『民間対聯故事』1987年第5期。

これに対し、広東・広西一帯の婚礼で行われていた「龍燭対」の習俗では、同様のやりとりが文字を介して取り交わされる。嫁取りの日に男の側から持ち込まれる品々の中に、一対の特大の蠟燭が含まれていて、その片方には男の側で金文字で上聯を書き込んでおく。もう一本の紅い蠟燭には、花嫁側にこれにかなう「答対」を書き入れてもらう。白族の場合とは男女の立場が入れ替わっている。その文句は、普通は「同心永結，比翼齊飛」といった常套的なものが多いのだが、時には相手方の教養レベルを試すような難度の高いものを人に頼んで作ってもらうこともあった。花嫁側でも対抗して大金を出して先生を呼んで来たり、人をやってあらかじめ男側から上聯を聞きだしておこうとしたりする。これにまつわる逸話、故事も伝わっている。そのモチーフはやはり、経済的知的優越を見せつけようとする側に対して、下層に位置付けられる貧農、子供や花嫁自身が見事切り返す下聯を作って人々の喝采を浴びるというおなじみのものである。²⁶⁾

* * *

文字に書き記されて場にさらされた対聯、書記モードの対聯にまつわる故事についてみたとき、そのプロットの趣向は自然と対聯の物的・情動的な存在形態の特性に負うところ大となる。その公開性に連なって発生する常なる付加・変更可能性がクローズアップされてくる。

例えば、一度張り出された対聯の字句に、時を隔ててまた別の文字が書き足されたり、読点が打ち変えられたりすることによって意味を更新し、張り出された場所に関わる人たちの運命に波乱を起こす。公然と書き出された文字が、その後作者またあるいはそれ以外のその場に関わる者の手によって改変を受ける過程の面白さ。オーソドックスな作者文芸には乏しい可塑的性格を対聯は持ってしまう。対聯の形式には五、七言の古典定型詩のような一句

26) 葉旭明「龍燭対 広東粵西婚俗的“挿曲”」『民間対聯故事』1989年第5期。

の字数に堅い枠がないことから、このような書きたしを常に受け付け可能としている。このとき対聯は絶えざる変更を受け付ける開かれた存在としてある。

さらに、書くこと、刻むことそのものから発するなにか根源的な面白さのようなものを、話者あるいは作者がそれを意識するしないとに関わらず、話は自ずと帯びてくるようだ。例えばこんな話。

国共内戦下の 1935 年のこと、村の若い石工の王小聡が、その村を通過した紅軍を称える対聯を作って、山に生える茅を束ねて筆とし、赤土を溶いて朱墨代わりとし、紅軍の宣伝員に頼んで道端の岩壁に書き付けてもらう。国民党はこの石工に、その文字を削り取れと命ずるが、彼は逆に夜中にこれを岩に刻み込んで村を立ち去る。怒った国民党の役人はセメントで文字を埋めさせるが、解放後また村に戻った石工はこれをまたもとに彫り戻す。²⁷⁾

場書きに書き付けられた文字が帯びる場所の力を借りて、対聯は様々な働きをする。

次稿では対聯と場所との絡み合い、対聯のトポグラフィーに焦点を合わせて、その諸相を観察してみることにしよう。(つづく)

27) 徐文仲「小石匠鑿聯頌紅軍」『民間対聯故事』1988 年第 4 期。